

寺町旧域(妙満寺跡)発掘調査現地説明会2資料

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

2016年11月5日

所在地：京都市中京区押小路通河原町西入榎木町

調査期間：2015年9月7日～2017年3月31日(予定)

はじめに

この調査は、京都市役所の新庁舎建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査で、現在までに約2800㎡の調査が終了しました。今年2月には、1区で本堂基壇跡の現地説明会を開催しました。今回は敷地南側の4区南(約1,300㎡)の遺構を対象にします。

調査している遺跡は、寺町旧域(妙満寺跡)にあたります。寺町は豊臣秀吉によって洛中の外郭線である御土居の内側、寺町通の東側に沿って築かれた寺院街です。妙満寺は、天正11年(1583)に四条堀川(妙満寺町)の地から、当地の寺町二条に移転してきます。昭和43年(1968)岩倉に移転するまでの約400年間、この地に本堂・祖師堂・方丈・庫裏・塔頭などが建ち並ぶ大伽藍がありました。

これまでの調査成果

1～3区の調査では、主に安土桃山時代から明治時代の本堂基壇、方丈や庫裏などの主要な建物と放生池、石組や瓦組の井戸、火災後処理土坑など多くの妙満寺の遺構を発見しています。また、寺町形成期の大規模な整地と、それ以前の室町時代の耕作地の痕跡も確認しています。遺物は、土師器・国産陶磁器・輸入陶磁器・瓦類・金属製品などが整理箱に約1,000箱分出土しています。

今回発見した遺構

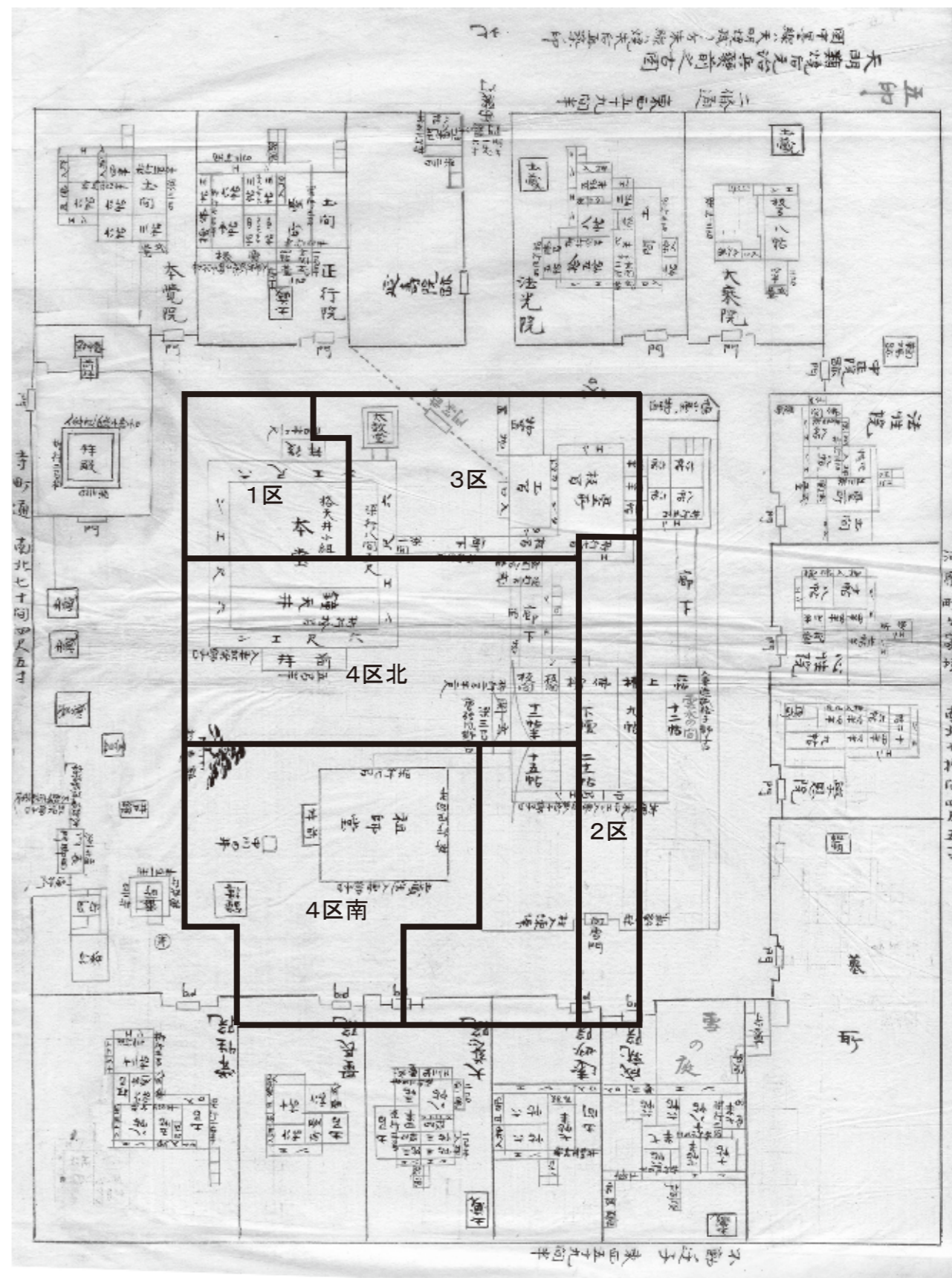
天明8年(1788)の火災後に改修され、禁門の変(1864年)で焼失した祖師堂跡を発見しました。西側には鐘楼跡・灯籠台跡・井戸跡(中川の井)・植栽跡(鶴亀松)なども確認されています。この祖師堂の遺構は、禁門の変後に再建された祖師堂の下で発見したものです。

祖師堂建物基壇は、東西約14m、南北約12m、当時の地表から約0.4mの高さが残っています。基壇外周には幅約1mの化粧石の抜取り跡が巡ります。基壇上には数列の柱列(礎石据付穴)が並んでいます。西面中央には前拝があり、南北幅約3.6m、西に約3.6m張り出します。

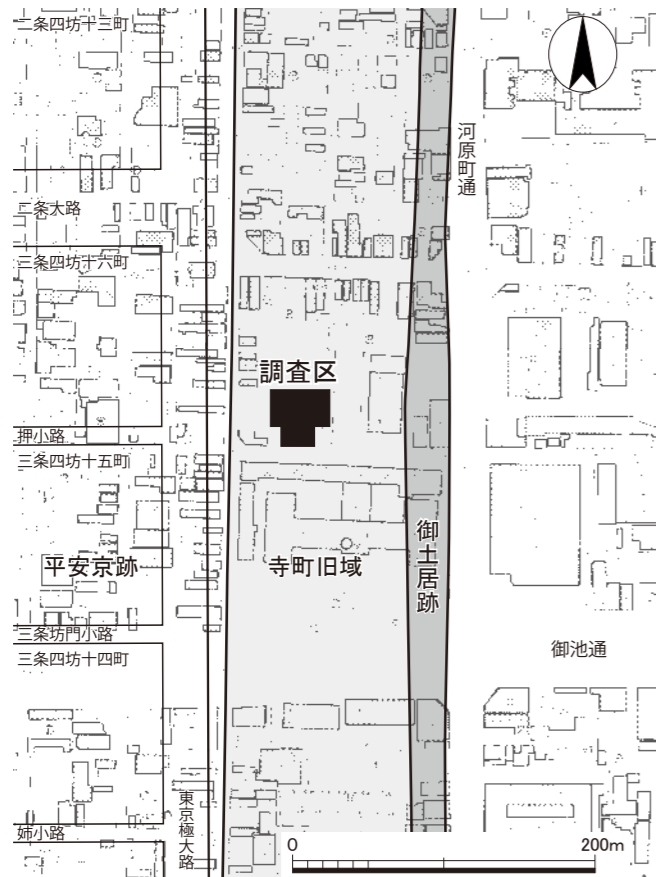
まとめ

妙満寺が所蔵する『妙満寺志稿』の絵図面によれば、禁門の変以前の祖師堂は、西向き、梁行四間半、桁行七間、西面中央部に前拝を設けていたことがわかります。

今回の発掘調査によって、実際の遺構が絵図面に合致するものが多く、その記載が正確であったこともわかりました。さらに断面の観察からは、下層にそれ以前(寛永期、創建期)の基壇が重層的に残っていることがわかります。本堂と同様に祖師堂も同じ位置で再建を繰り返していました。



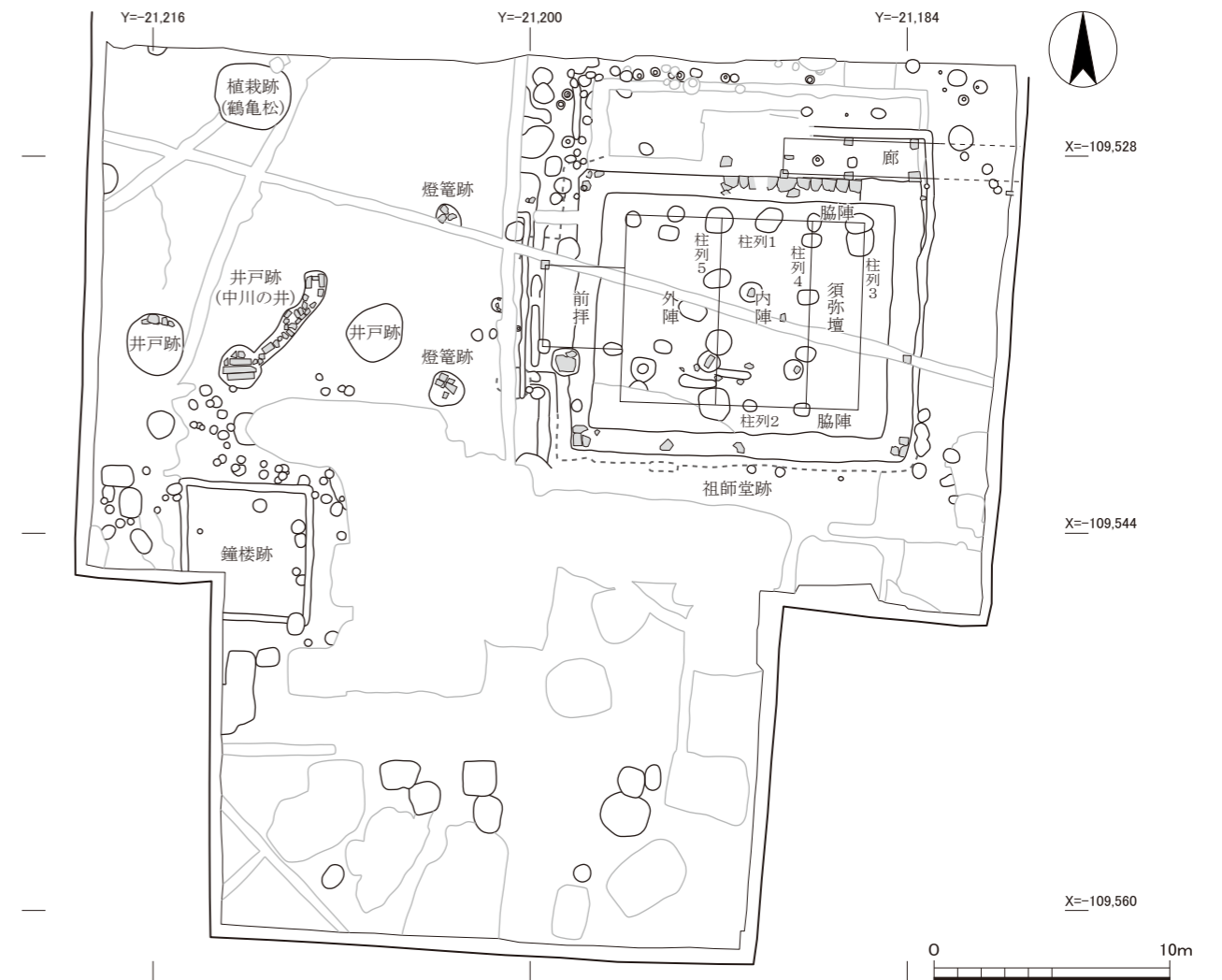
「天明類焼后元治兵燹前ノ古図」『妙満寺志稿』より (黒太枠は調査区)



調査地位置図 (1 : 5,000)



寺町内における妙満寺の位置 (『洛中絵図』より)



調査区平面図 (1 : 300)



上層で検出した禁門の変(1864年)後の祖師堂跡 (西から)



調査区全景 天明8年(1788)火災後の祖師堂跡 (西から)